

# 山と博物館

第30巻 第1号

1985年1月25日

大町山岳博物館



冬の五竜岳

古幡和敬撮影

より豊かな中学生の集団登山を願って

大自然の教えを請うて、登山が学校教育の中にとり入れられて以来凡そ七十年、時に博物探索に偏ったり、体力練成に傾いたり、或は事故を恐れての消極傾向等若干の曲折を辿り、戦後集団登山の名称が被されたこの登山も、近代スポーツ登山の大衆化の中で教育価値をいよいよ認知され確かに位置づいてきた。

山岳という大自然界に踏み込んで行動する中から学び得るものは余りにも無量である。しかし、現在中学校で実施する一泊二日の登山では多くを学ばせたいという願いは自と限界が生じる。参加生徒にとっては初めての経験。体力、知識、意欲すべて百人百様の資質。男女混合の大部隊。危険に近い弱点を持つこの集団登山隊の掲げる目標は何か。それは、「生徒に山岳の偉大さ素晴らしさに触れさせ、自然を愛好し、安全に親しむ行為の出来る人間の基礎づくり」にあると言いたい。この目標達成のためには運営全般に亘って、自然の視つめ方、安全で楽しい山登りの仕方、より良い自然への親しみ方といったものを、生徒自らが求めて動く様に意図して仕組んでいかななくてはならない。多くの知識を語込む学術登山や、鼻面を引き廻す引率登山に終ったり、アクシデントに怯えて安全登山が安易登山にすり代ってしまつては、将来自然を拒絶したり汚損する人間しか育たない。指導者は生徒の自然への興味、夢、探究心を誘発する術に意を払うべきだ。準備段階から山行当日まで盛り沢山の注意や知識の注入があり過ぎる。

例は登山の架だ、高山の動植物は勿論地学、医学、通信、絵画、救助機構、音楽(民謡)とあらゆるものを盛り込んで恰も山岳小百科事典の態だ。準備も本番も生徒が更に学習を深めようとするキッカケをつくってやることだ。「山(自然)は黙って体で感じて下りてくるもの」でありたい。危険箇所ですべて息をひそめてみていた安全対策を構する教師の姿が尊い教訓となる。引率教師は登山技術の練達者でなくてよい。瑞々しい気力の中学生に山を好きにさせることに腐心する情熱の人であってほしい。(元長野県山岳総合セン

ター専門主事 青柳 安昭)

## ウエストンとハーン

## 三井嘉雄

本業の牧師としてよりも、日本アルプスの早期登山者として知られるウォルター・ウエストンと、文豪ラフカディオ・ハーン、のちの小泉八雲については、共通点があまりにも多い。

お互いにイギリス国籍であり、不正直を嫌い、がんこ一徹であったこと、日本にいたパシル・ホール・チェインバレンが共通の友人であったこと、九州の熊本が任地であり、そのあと神戸に移ったことなどである。しかも神戸では、少なくとも半年間は近くに住んでいたことであつた。

このときウエストンは三十二才、ハーンは四十四才であつた。年齢の差や、日本での知名度を考慮しても、二人はかなり顔を合わせることがあり、相知っていたと考えざるを得ない。

そればかりではない。異国である日本の風土と人情をこよなく愛し、ハーンは骨を埋め



明治31年発行の「神戸市現図」(部分)

○印はウエストンの住居

ることになる。さらに、チェインバレンがメイソンと編集した『A Handbook for Japan』(日本案内書)の改訂版では、ウエストンが北アルプス地方を補記し、ハーンは松江や熊本地方を担当したのだつた。

そして、二人のいくつかの著書のうち題名まで相似しているものがある。ハーンによる『Glimpses in Unfamiliar Japan』(知られぬ日本の面影)、『The Future of the Far East』(極東の将来)に対し、ウエストンは『A Wanderer in Unfamiliar Japan』(知られぬ日本の旅行者)、『The Playground of the Far East』(極東の遊歩場)などである。意識していたことは、事実であろう。

また、この二人より前に出版された『Scenery of the Far East』(極東の精神)は、アメリカ人パーシバル・ロウエルによるものだが、ハーンは『神国日本』の中でこの本のことにふれて、「私の有する凡ての東洋の書籍を集めたよりも遙かに豊富な内容をもつて居る」と賞讃している。一方のウエストンは、同じロウエルの『Noto, an unexplored Corner of Japan』(能登・人に知られぬ日本の辺境)を読んだらしく、ロウエルが立山温泉から針ノ木峠に行こうとしたが、荒廃して行けなかつたことを、『日本アルプスの登山と探検』の中に引用している。

ウエストンは、明治二十一年二月に宣教師として熊本に着任し、翌年、神戸の聖ミカエル教会のチャプレンとなつて神戸に移つた。

そして、二十八年四月に最初の帰国をするまで、神戸市中山手通三ノ一四にいた。そこは明治三十五年の図面によると、一九九・五〇坪とある。この番地には聖ミカエル教会があ

り、その敷地内にウエストンの住居があつた。ウエストンが槍ヶ岳などに初めて歩を進めた時代である。それらの建物は、戦災で消えてしまつた。

ハーンは明治二十三年に松江の中学校の英語教師を勤めたあと、二十七年十月まで熊本に住んだ。ところが、日清戦争が始まつて外人への風当たりも強くなり、収入が減るのを承知で、英字新聞『神戸クロニクル』の論説員となつて神戸に移り住んだ。

最初は下山手通四ノ七だつたが、これは、ウエストンの住居と直距離で三百メートルほどである。ハーンは、半月もしないうちに六ノ二六に移り、そして中山手通七ノ番外九六へ引越している。ほとんど知られていないことだが、ハーンが神戸で最初に住んだ家は、移築されて山本通四に現存している。十坪くらいの平屋で、床の間もある。

ハーンは船が横浜へ着いた日、アメリカを発つとき紹介されたミツチエル・マクドナルドに会い、チェインバレンへの紹介状を得て、すぐに求職についての手紙を出している。

このマクドナルドは米國海軍の主計官であ



神戸の聖ミカエル教会 昭和20年6月の大空襲で焼失した

り、退役後は横浜グラランド・ホテルの社長になつて、ハーンの没後にも遺族を助けた生涯の友人であつた。

チェインバレンは明治六年に日本に来て、十九年からは東京帝国大学の文学部教授であつた。チェインバレンは、このときすでにハーンの書物を読んでいたという。ハーンが日本へ行くことを決心させた書物が、チェインバレンの英訳した『古事記』であつたのも、因縁の深さを感じさせる。さらに、ハーンを明治二十九年から東京帝国大学に招くための仲立ちをしたのも、チェインバレンであつた。

チェインバレンが著した『日本事物誌』の改訂版では、ウエストンの『日本アルプスの登山と探検』が紹介されていて、「ウォルター・ウエストン師は、この登山を最初に一般的なものにした人である。」とも述べている。ウエストンも著書の中で、「マリーの記事をよく研究しておくべきである。」と記している。マリーというのは、ロンドンの出版社ジョン・マリーのことで、つまり、チェインバレンがマリーから出した『A Handbook』のことなのであつた。そればかりではない。ウエストンの著書もジョン・マリーからであつたが、その序文の中では、「東京帝国大学博言学の名譽教授B・H・チェインバレン氏から、いろいろの知識、とくに迷信と地方の風俗について見聞を得たことに感謝する。」ともしている。

チェインバレンは、地質学のベンジヤミン・スミス・ライマンなどと同様に、西欧の近代の技術を日本にもたらした国内の外人の中でも、指導的な立場の人物であつた。

ウエストンが宣教師の地になぜ日本を選んだのか、そして、なぜ最初が熊本だつたのかについては、まだ解明できていない。ただ、神戸へ転任した理由については推察できる。ケンブリッジ大学の先輩であつた聖ミカエル教会のH・J・フォスが招いたものであろう。

聖ミカエル教会は明治十四年の新築だが、



榎ヶ岳登山のウェストン(右)坊主の岩小屋で

十年後に火災で焼失し、二十七年に再建されたばかりであった。また、フォスはこの教会の近くの純日本風の家を松乃舎と名づけて住んでいた。この点は、ハーンと通じるものがある。ハーンは熊本第五高等中学校に赴任したとき、用意されていた外人官舎をさせて純日本風の家を借りたし、東京でも大学が準備した家ではなく、当時は田舎であった西大久保の日本式の住宅に住んだのだった。

明治二十七年八月、北アルプス登山の途中で、ウェストンは松本で覚前政蔵の日曜礼拝式に参加した。その二年前に、カナダ人ケネディがはじめたばかりの伝導所で、ウェストンと同じ聖公会派に属していた。この覚前は、ウェストンが帰国したあとの明治三十三年には、神戸の聖ミカエル教会に勤めることにな

る。さて、この聖ミカエル教会で、ウェストンは大変な功績を残している。ウェストンは、その信徒の中で日本人と分けて、イギリス人だけのオール・セイント教会(諸聖徒教会)を設立することを提唱して、ウェストンの帰英後に実現した。明治三十一年だった。ここへは、東京から水野、辻井などが牧師として着任した。分離させた理由は、当時、神戸に在任していたイギリス人の中に宗教心に欠ける人たちがあり、ウェストンが心を痛めたためであった。

これについては、ハーンも同意見であったらしい。神戸時代の前半に書かれた「心」によると、居留地での外国人による野蛮で不道徳な行為が、日本の新聞に載ったことなどを挙げて、ではあるが、「そして基督教の伝導事業も、日本人宣教師に委ねなければならぬ」ともしている。また、「神戸クロニクル」紙上に記したところでは、「西洋の改宗勧告者たちの努力」についても評価していない。

ハーンはイギリスとフランスで、どちらもカトリックの学校に学んだが、日本に来てからのカトリック嫌いは有名である。

この点だけが、ウェストンとハーンの間で一つの違いなのであった。ハーンが純日本風を好み、西洋化された神戸を俗悪と理解した延長だったとも考えられる。しかし晩年には、宗教教育も必要だと述べている。また、

節子夫人によると、三冊の聖書が大切に保存されていたという。

さらにハーンによると、この外人居留地ではイギリス人が最多数だったとして、小さな社会では、お互いに他の各人についても総てを知っている、とも記している。

過労で残る目の視力が衰えたのも、このころだった。当然のことながら、ハーンが自分の目を大切にすることは人並み以上で、永住したかった松江を離れたのも、その冬の寒さが目に悪いと考えたからだった。

それにしても、松江の人たちが見たハーンの評判はとても良かった。明治二十三年九月十四日の「松江日報」は、西洋人はとくに自国と比べて日本を未開だというが、「今度本県に雇入れられたるお雇教師ヘルン氏は感心にも全く之に反して、日本の風俗人情を賞讃すること切りにして其身も常に日本の衣服を着して日本の食事を食し、只管日本に癖するが如き風あり」としている。

小泉八雲と改名したのは、神戸に来て次の年のことだった。

ウェストンの近視の方も、かなりなものだ

た。横浜の住居にウェストンを訪れた小島鳥水によると、ウェストンは眼鏡をつける時間もおろそかに、スリ足で廊下を歩いて来たという。しかも小島が、ウェストンを北アルプスに案内した獵師に聞いたところ、ウェストンの登山はゆっくりとした歩みであり、それはウェストンが近視だったことが一因だとしている。この小島も、チェインバレンと交友のあった一人である。

おまけに、小島はウェストンについて、「英国人としては寧ろ短軀の方なるべけれど、(『日本山水論』)とするが、それはハーンにとっても、まさに同じだった。

そして、ハーンが日本の神道や祖先崇拜に心を打たれたように、ウェストンは、御岳山や立山などの独特の信仰登山に興味を覚えるのだった。小島が見たウェストンの書架には、日本研究の書物がいっぱいだったという。

ウェストンは『極東の遊歩場』で、ハーンの「日本・一つの解釈」について記している。その中では、興味深い考察ではあるが、中に誤まったところもあると指摘している。

それに、「日本アルプスの登山と探検」の中でも、ラフカディオ・ハーン氏として敬称を付しているところをみても、ウェストンはハーンと知り合っていたことが認められる。親友ダグラス・フレッシユフィールドについても同じだった。

ラフカディオ・ハーンが小泉八雲となった年、中山手通に一人のポルトガル人が二度目の日本住まいを始めた。ハーンと同じように日本人を妻とし、日本文化を研究した親日家である。神戸や大阪の総領事としてよりも、「大日本」などの著者として知られるウエッセ・デ・モラエスだった。

(登山史研究者)

A TRANSLATION OF THE "KO-JI-KI,"  
OR  
"RECORDS OF ANCIENT MATTERS."  
(古事記)

By BASIL HALL CHAMBERLAIN.

[Read before the Asiatic Society of Japan April 12th, May 10th, and June 21st, 1882.]

INTRODUCTION.

Of all the mass of Japanese literature, which lies before us as the result of nearly twelve centuries of book-making, the most important monument is the work entitled "Ko-ji-ki" or "Records of Ancient Matters," which was completed in A. D. 712. It is the most important because it has preserved for us more faithfully than any other book the mythology, the manners, the language, and the traditional history of

<sup>1</sup>Should the claim of Accadian be considered an Altaic language be substantiated, then Archaic Japanese will have to be content with the second place in the Altaic family. Taking the word Altaic in its usual acceptation, viz., as the generic name of all the languages belonging to the Manchu, Mongolian, Turkish and Finnish groups, not only the Arohaic, but the Classical, literature of Japan carries us back several centuries beyond the earliest extant documents of any other Altaic tongue.—For a discussion of the age of the most ancient Tamil documents see the Introduction to Bishop Caldwell's "Comparative Grammar of the Dravidian Languages," p. 91 et seq.

AR. VOL. 2.—1.

チェインバレンが英訳した「古事記」

つた。横浜の住居にウェストンを訪れた小島鳥水によると、ウェストンは眼鏡をつける時間もおろそかに、スリ足で廊下を歩いて来たという。しかも小島が、ウェストンを北アルプスに案内した獵師に聞いたところ、ウェストンの登山はゆっくりとした歩みであり、それはウェストンが近視だったことが一因だとしている。この小島も、チェインバレンと交友のあった一人である。

おまけに、小島はウェストンについて、「英国人としては寧ろ短軀の方なるべけれど、(『日本山水論』)とするが、それはハーンにとっても、まさに同じだった。

そして、ハーンが日本の神道や祖先崇拜に心を打たれたように、ウェストンは、御岳山や立山などの独特の信仰登山に興味を覚えるのだった。小島が見たウェストンの書架には、日本研究の書物がいっぱいだったという。

ウェストンは『極東の遊歩場』で、ハーンの「日本・一つの解釈」について記している。その中では、興味深い考察ではあるが、中に誤まったところもあると指摘している。

それに、「日本アルプスの登山と探検」の中でも、ラフカディオ・ハーン氏として敬称を付しているところをみても、ウェストンはハーンと知り合っていたことが認められる。親友ダグラス・フレッシユフィールドについても同じだった。

ラフカディオ・ハーンが小泉八雲となった年、中山手通に一人のポルトガル人が二度目の日本住まいを始めた。ハーンと同じように日本人を妻とし、日本文化を研究した親日家である。神戸や大阪の総領事としてよりも、「大日本」などの著者として知られるウエッセ・デ・モラエスだった。

(登山史研究者)

# 雨飾山の植物

## 池上睦美

### 一、雨飾山の概要

雨飾山(一九五〇、三三三)は、長野県小谷村と新潟県糸魚川市との境界にあって、上信越国立公園の西端にある盟峰である。雨飾山は「霧のたんと晴れない山で、いつも雨をかぶっているから雨飾の名がある。」と言われるが、ほんとうの名の由来ははっきりしていない。頂上は二つのピークよりなり、北峰には風化した石の祠や小さな石仏があり、また雨飾山と阿弥陀如来の伝説などから、信仰の山であったことがわかる。山体は角閃石安山岩および珪岩によって構成され、柱状節理の見事な岩壁や露頭に富み、大崩壊地もいくつも見られる。登山コースは、小谷温泉からのコース、



ミヤマハンショウズル

大綱側よりのコース、そして糸魚川市の梶山温泉からのコースの三つがある。近年県内外からの登山者が増加している。

雨飾山は森林帯からみると、水平的には温帯落葉広葉樹林帯―ブナ帯または低山帯―と呼ばれる領域である。雨飾山の下部標高約八〇〇mから一五〇〇mぐらいまでの低山帯には、高木のブナが優占し、ウダイカンバ、サワグルミ、トチノキ、ホウノキ等の高木や、ユキツバキ、ヒメモチ、エゾノユズリハ、マルバマンサク、オオバクロモジ等の日本海要素とみられる低木、イトマキイタヤ、ハウチワカエデ等のカエデ類が共存し、ブナ林の自然植生を形成し見事である。林床にはチシマザサが生えているところから、日本海側の多雪地帯に分布しているブナ―チシマザサ群集と呼ばれる領域でもある。森林の垂直分布から見ると、雨飾山の標高は日本アルプスの山々よりは低い、一七〇〇m以上は寒帯灌木帯―ハイマツ帯または高山帯―と呼ばれる領域の様相を示している。日本海側の多雪地帯の高い山に見られるように、常緑針葉樹林帯―シラビツ帯または亜高山帯―を代表する、オオシラビツやコマツガ等からなる針葉樹林が存在していないことである。頂上付近にわずかにコマツガやシラビツが生えているにすぎない。

### 二、高山植物

大綱コースでは、標高約一七〇〇mから上は低木林もなく、岩壁や岩石地、崩壊地であり、しかも急峻である。岩石地にはアイズシモツケ、イワシモツケ、ミネヤナギ等の低木が岩石上を這うようにして生えている。ハイマツも岩場に現われ頂上まで点在して生



ニヨホウチドリ

えている。尾根道付近の砂礫地の草地で最初に見られる高山植物は、ハクサンチドリ、テガチドリ、ヨツバシオガマ、岩礫地にはイワベンケイ、ミヤマハンショウズルである。登山道から入った岩礫地の中には、ウラジロキンバイが黄色の花を咲かせて群生しているのが珍しい。標高一八四〇m付近の岩石地には、ミヤママンネングサ、ミヤマウイキョウ、ケミヤマクワガタ、チシマゼキシヨウ、シロウマアサツギが生えている。砂礫地には、イワオオギ、シロウマオオギが、草地のよく発達した岩礫地には、ユキワリソウ、ミヤマダイコンソウ、ハクサンイチゲが入り混じって、白色・黄色・紅色の花を咲かせて美しい。ハイマツの下にはコケモモ、ミツバオオレンが付近にはタカネバラ、タカネナデシコ、タカネマツムシソウが花を咲かせている。頂上西側の急峻な岩礫地で、乾燥しやすい草地には、ニヨホウチドリ、ミヤマコゴメグサ、イブキジャコウソウ、ミヤママンネングサ、シコタンソウ、タカネコウリンカ、ヒメシヤジン、ミヤマラッキョウが花を咲かせている。

小谷温泉からのコースでは、大綱コースとは異って標高一六〇〇mから頂上までは、チシマザサが一面に繁茂している。荒菅沢の雪渓を過ぎて、急斜面を登って尾根にでると、晴れた日には鹿島槍・五竜・白馬三山など、

北アルプス北部の雄大な山岳景観が眼前に広がり見事である。北西には根知の谷から糸魚川市、日本海、遠方には能登半島まで展望することができる。尾根道にそってでてくる高山植物は(大綱コースで書いた高山植物は除く)アカモノ、シラタマノキ、ベニバナイチゴ等の低木や、エゾシオガマ、シナノオトギリ、ミヤマコウゾリナ、ゴゼンタチバナ、キバナノカワラマツバ、オヤマリンドウ、タテヤマウツボグサ、ウメバチソウ、シナノオトギリ、キバナアツモリソウ等である。尾根道の南側にあるただ一つの池塘付近には、チングルマ、イワカガミ、キヌガサソウ、モミジカラマツ、ハクサンフウロが花を咲かせている。頂上までの急斜面の登りでは、オオカサモチ、ミヤマタンポポ、ムシトリスミレ、シロバナヒメシヤジン等が見られ、頂上近くではオヤマザサ等が花を咲かせている。

雨飾山の植物は六月中旬から九月上旬までが活動の期間であり、この間に高山植物やそれ以外の数多くの植物が次から次へと花を咲かせる。特に七月下旬から八月上旬は花の最盛期で、標高一七〇〇mから上では登山者の目を楽ませてもらえる。ほんとうに興味深い目である。(長野県植物研究会会員)

山と博物館 第30巻 第1号  
 発行所 長野県大町市 TEL222(0211)  
 印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館  
 定価 年額二二〇〇円(送料共) 切手不可  
 郵便振替口座番号 長野四一三一九三